

## シャロレ伯爵 (10)

リヒャルト・ベア＝ホフマン著  
松川 弘\*・訳

(平成30年10月19日受付)

### Der Graf von Charolais (10)

von  
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen  
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 19, 2018)

裁判長：  
何をするつもりなんだ・・・

もうすべてが終わりました！ なぜ、あなたは私を止めた  
んですか？

デジレー：  
(彼と争い、憧れを込めて叫ぶ)  
死ぬんです！

シャロレ：  
(低い声で)  
彼女は正道を歩んでいたのに！

裁判長：  
窓のところには行かせないぞ！

デジレー：  
(彼の言葉を聞いて)  
許して下さい！ 私は、彼を再び見出したのです！  
(父親から逃れようとする)  
放して下さい、お父様！

デジレー：  
(彼から身をもぎ離そうとする)  
大きく開かれたたくさんの窓やドアが、この恥辱から私を  
連れ出してくれます。あなたが、そのすべての前で見張りに  
立つなんてことは出来ません！ 私を放して下さい！

裁判長：  
(彼女に抱きついて)  
わしはお前を見捨てはしないよ！ 死んではいけない！

裁判長：  
(彼女を窓から引き離す。彼らは、二人とも、張り出しの階  
段の上に立っている。開いた窓を通して、雪が部屋の中に  
舞い落ち、月明かりは前よりも強くなる)  
そこを離れるんだ！

デジレー：  
(非常に早口で)  
でも、私にはそれが許されているんです！

デジレー：  
(疲れ果てて、争うのをやめる)

裁判長：  
お前の父親である、このわしが、それを禁じているんだ！

\* 広島工業大学工学部電気システム工学科

デジレー：

(苦笑して)

あそこにいる、私の夫が、それを許したのです！

裁判長：

だが、お前のしようとしていることは、神が禁じている！  
それは罪悪なのだ！

デジレー：

罪悪ですって！ 私の立っているここでは、その言葉は、  
何の響きも持ってはいません！ あなたがそれを禁じよう  
が、彼がそれを許そうが、私自身が、もう生きてはいられ  
ないのです！ 私は、罰も受けずに、その罪を免れるわけ  
にはいきません！ 鞭打たれ、血みどろの、口の開いたミ  
ミズ腫れに覆われ、すべての恥辱に引きずられて、すっか  
り傷ついた私は、汚れ切っているのです・・・

裁判長：

(シャロレに向かって、脅すように首を振る)

あの邪悪な男が、お前の体に、毒と汚物をかけたんだ・・・  
(彼女の頭を抱き寄せて、自分の仔をなめる獣のように、彼  
女の顔に、一心不乱に口付けする)  
ごらん、この父が、この唇で、お前に付いたものを拭って  
やろう！ お前を清めてやろう！ 一緒に来なさい！ 家  
に帰ろう！

(彼は、娘をやさしく階段に座らせる。左手で、しっかり彼  
女を抱き締め、右手で、彼女にコートをはおらせ、彼女が  
シャロレの方を見るのをさえぎろうとする。彼は、出口の  
ドアの方に、一步一步、彼女を歩ませ、快活さを装っては  
いるが、不安そうに、彼女に話しかける。時折、彼は、  
シャロレの方を振り返って見るが、シャロレは、二人の方  
を向いて、落ち着いて、腕組みしながら立っている)  
家に帰りさえすれば、お前も考えが変わるだろう！ わし  
は、お前のそばにいてやろう。一人にはしておかないよ！  
お前を寝台に運んで行って、そばに座っていてやろう。  
ずっと前、お前がまだ小さかった頃、よくしてやったよう  
に、枕を整え、毛布を掛けてやろう。それから、二人して、  
神に祈りを捧げるんだ！ 神は、わたちをお救いになる  
だろう！ 分かったかね？ あの男の方を見るんじゃない！  
わしは、一晩中、お前のそばで起きていてやろう。  
ただ、気がかりなのは、朝方、疲れて、椅子に座ったまま  
居眠りをしてしまうかも知れないということだ。わしはも  
う老人だからね！ そんな時、こっそり出で行っちゃいけ  
ないよ！ いいかい！ 絶対、だめだよ！ そんなことは  
しないと、約束してくれ！ お前は具合が悪いんだから！  
今は大したことがないにしてもだ！ いい子だから！

(彼女に口づけする)

お前は、よろめいているじゃないか！ とにかく、来な  
さい！ 自分で歩けないのなら、しばらくの間、わしがお前  
を抱いて行ってやってもいい！ 以前は、よくそうしたも  
のだ！ お前がもうかなり大きくなり、重くなってからの  
話だが、ある秋の一日、家から一時間以上も離れた森の中  
で、お前が足を痛めたことがあった。薄明の中、腕に抱か  
れて眠り込んだお前を、わしは運んで行ったんだ。お前は  
だんだん重くなっていくようだった。年老いたわしの脚は、  
なかなか進みたがらず、道は無限に続くように思われた。  
わしは、ほとんど息も出来なくなった。それほど重く、お  
前はわしの胸にのしかかっていたんだ。それでも、わしは  
お前を家まで運んで行った！ 来るんだ！ すぐ家に帰ろ  
う！ この階段を素早く駆け降り、橋を渡り、庭を通り抜  
けて・・・

(彼らはドアのところにたどり着く)

デジレー：

(父親から身をもぎ離して)

階段と、橋と、庭の池！ この三つは、どれもあなたより  
力があります！ お父様、あなたはどのように私のそばにい  
る必要がありますの！ あなたに、私の邪魔は出来ません  
わ！

裁判長：

(彼女にしがみ付き、懸命に)

出来るとも！ お前の首にかじり付いてやるさ！ お前は、  
わしから離れることは出来ないんだ！ 一緒に石畳の道を  
下って、池の方に行くんだ！ 酷いやつだな、お前は！  
わしを一人っきりにするつもりなのか？ わしにどうしろ  
というんだ？ 言ってくれ！

デジレー：

(小声で、顔の表情を変えずに)

もうお話したくありません！ そっとしておいて下さい。

裁判長：

(腕を掲げる。言葉が彼の口をついて飛び出す)

かつて一度、彼女が生まれたとき、私はこの子の命乞いを  
しました。主よ！ あのととき、あなたは奇跡を起こして下  
さった！ 今一度、お願いします！ 私の言葉は、彼女に  
は通じないのです！ 一生、あなたを誉め讃えてきた、こ  
の萎びた唇から、言葉を飛び出させて下さい！ 素晴らしい  
言葉を！ 彼女の心を打つ言葉を！ 彼女を生かす言葉  
を！

デジレー：

（突然、笑い出す）

私は、これ以上生きたいとは思いません！ ご覧なさい、私の口は、苦いもので一杯です。私の舌は、もう生の味を忘れてしまいました。苦いものばかり。それを、私は、何かを飲んで洗い流すことも出来ないし、咳払いして口から吐き出すことも出来ないのです！ 私は生きていたくありません！ ただ、むかつきから解放されて、息がつかいたい。深呼吸して、この胸を純粋なもので満たしてみたい。春の夕べの清々しい空気を大きく吸い込んで、それを心ゆくまで飲み込みたいのです！ そして、それは、私が末期の息をつくとき以外には不可能なのです！

（ゆっくりシャロレの方に歩み寄る）

裁判長：

彼のところに行くのか！ あの子の心は、何時も彼の方にだけ向いている！ それじゃ、行くがいい！ わしも、お前と一緒にこう！

（彼女の手を取り、覚束ない足取りで、彼女を性急にシャロレの方に引っ張って行く。シャロレは、彼らの方を向かず、腕を組み、顔の表情を変えず、眼を伏せたまま、じっと立っている）

神は、わしの祈りを聞き届けては下さらぬのか！ わしが君のところに行くから、わしの言うことを聞いてくれ！ 一言だけでもいい！ 彼女を生かす言葉をかけてくれ！ 目を閉じていないで！ わしたちの方を見るんだ！ それから、正義が十分になされているかどうか、言ってくれ！

（首を振りながら）

黙っている以上、君の行ないは正しいとは言えない！

（警告するように、指を立てて）

君の行為は、正しくない・・・

シャロレ：

（彼の方を見ずに、はっきりと、厳しく）

正義とは、何ですか？ 不正義とは、何なのですか？ 正義は、神の御許にあるのです！ 私は一個の人間であって、ただ不正を働き、それを苦にすることしか出来ません！

（苦悶の表情で）

苦しめることしか！

裁判長：

（手をもみ合わせて、初めは自制し、次第に興奮に身をふるわせながら）

神を盾に取ってはいけない！ もしこの言葉が気に入らなければ、君は「正義」とは無縁だ！ 君には、このわしの法服が尊大にすぎるのか・・・

（肩からマントを剥ぎ取る）

わしから、誇りと威厳とを剥ぎ取って見たまえ！ 哀れな八十歳の老人が、子供の命乞いをしているにすぎんだ！ それでもまだ、わしがそっくり返って見えるというのなら、見たまえ・・・

（ひざまずく）

ここで、神の前でしかひざまずいたことのない、このわしが、君の前でひざまずいているのだ！ 額を床に擦りつけ、この白髪で、床板の汚れを清めているのだ！ 威厳をなくした、この哀れなわしは、深い苦悩に打ちのめされている！ そういっても、まだ高慢にすぎるかも知れない！ 最後の威厳すら、わしは捨て去った。もはや人間ではない。追い立てられ、責めさいなまれ、君の前の地面でのたうち回る獣なのだ。叫び、子供の命乞いをする哀れな獣だ！ お願いだ！ わしに同情してくれ！ 温情を示してくれ！

シャロレ：

（辛辣さと苦悩、勝利感が奇妙に入り交じった、厳しく、ほとんど叩きつけるような声で）

慈悲もまた、神の御許にしかない！ 公正と慈悲。神だけが、この二つを兼ね備えている。神の御名を誉め讃えよ！

裁判長：

（半ば立ち上がって）

神を嘲弄するつもりか？！

シャロレ：

（最初は驚きを装って、それから仮面を脱ぎ、きわめて苦々しげに）

神を公正で慈悲深いということが、どうして神を嘲弄することになるんです？！ 八十年にわたって培ってきた知恵を、あなたは今、見直した方がいいんじゃないですか？！ 私が亡父を心から尊敬していたので、あなたは娘を私に与えた。事の起こりは、それだったのです！ 私は敬虔だったので、あなたに好意を持たれた。そのおかげで、私は今になって悩まねばならない！ これがあなたの報いなのだ！

（高笑いして）

正義なのだ！ あなたは神に子供の命乞いをした。神は子供の命を保証したのだ！ 子供のことであなたを喜ばせ、あなたを稀なほど長生きさせたのだ！

（賛歌を歌うように）

慈悲深き神よ！ あなたには、神の意図がお分かりですか？

（秘密を打ち明けるように、身をかがめて、小声で）

神は、私たちと一緒にふざけているのです！ 彼はからかっているのです！ 主人がからかった場合、私たち下僕

は、その冗談を是認し、一緒になって笑うよりほか仕方がないのです！

裁判長：

(身を起こし、ギョッとする)

君は、神を冒瀆している！

デジレー：

(二人の間に立って)

お父様、この人は悩んでいるのです！

裁判長：

彼に同情しろというのか？ このわしには同情してくれないのか？ お前は、一体誰に操を立てているんだ、この出来損ないめ？！ この父にじゃなかりやう！ この男にじゃなかりやう！ 死んだあの男にじゃなかりやう！ たった今欺いたばかりの男の許に、お前は戻ろうとしている。お前が操を立てているのは、一体誰なんだ？

シャロレ：

やっど、この女の正体が分かったようですね！

デジレー：

その子供を私が生んだ人です！ 彼を理解してあげて下さい、お父様！

(自分の苦悩を、一種の客観化で隠蔽しようとする)

彼は強くないのです——他でもない自分の生活を守ろうとしているのです！ 私を愛し、この愛なしでは生きていけないと思っているのです。この人は、それを救おうとします——たとえそれが私の死を意味しているとしても！ 彼を理解してあげて下さい、お父様！ 私は彼のことをよく理解しています！ この人は、再び私を愛するために、私に死を望んでいるのです。

(シャロレのすぐそばに歩み寄り、彼に向かって)

この場でそれをするには許されないとお思いなのですか？ すぐにまた、許しが出るでしょう！

(彼のかたわらに膝をついて、垂れた彼の腕を撫でる)

私は、あなたを愛しています！ あなたほど愛した人は他にいません！ 今は以前にも増して、あなたを愛しています！ 私には分かるのです。憎しみではなく、愛が私の心を打ったのです！ 大きな愛だけが！ だからこそ、私は、自分を打つあなたの手にこうして接吻するのです！

シャロレ：

利いた風なことを言うな！

まず手を差し伸べ、涙を浮かべ、こっちの涙を期待し、そ

れから唇を寄せ、最後は和解に持ち込むつもりだろうが！ 中にもうベッドが用意してあるんだろう！ いまいましい奴だ！ お前の父親は、ドアの前に座り込んで、誰も邪魔しないように見張っている。彼は、俺達の和解を喜んでる！ そんなことをお前は想像しているんだろう！ それがお前の望みなんだろう！ どうして俺の顔ばかり見るんだ？

デジレー：

(身を起こし、悲しみに沈んで、彼を見つめる)

そんな風に、あなたは私のことをお考えなのですか？ 私は・・・

(「私はもう何も望みません」と言いたげに、彼女は、悲しげに微笑んで首を振り、シャロレがベルトに差した狩猟用の短刀に目をやる)

私があなたから欲しいのは、ただこれだけです・・・

(彼女は、素早く短刀をつかむと、シャロレから離れる)

そして今は・・・

(彼女は、その短刀で自分の胸を突く)

もう何もいりません！

(一瞬、彼女は体を起こし、それからくずおれる)

裁判長：

(彼女を床から引き起こす)

何ということだ！ 助けてくれ！ 医者を呼ぶんだ！

(シャロレに向かって)

この人殺し！

(恐ろしい目つきで、彼は、シャロレの助けをはねつけ、意識のないデジレーを腕に抱く。一步一步あえぎながら、ベッドにたどり着こうとして、重荷にほとほと疲れ果てる。入口のドアが開いて、宿屋の主人と、点燈したランタンを手にした彼の父親が入ってくる。ロモントは、自分が見張っていたドアから不本意ながら数歩離れ、前に進み出て、手の動きで、二人に、後ろにいるよう指図する。宿屋の主人は立ち止まるが、彼の盲目の父親は、ゆっくり、前方に歩き続ける。デジレーが話し始めたとき、はじめて彼は立ち止まり、不安そうに耳を澄ませる)

デジレー：

(目を見開く。小声で、ゆっくり、はっきり声を発する。彼女の話は、時折、深い吐息で中断される)

息を切らせていますね！ 胸が苦しいのですか？ 私の体が重すぎるのですか？

裁判長：

(苦しげに)

死ぬんじゃないよ！

デジレー：

死ぬんだと思います！ 服を着せ替えてください！ 血まみれのまま、棺に横たわりたくはありませんから！ 誰かが、私の体を洗い清めてくれるのでしょうか？

裁判長：

（彼女をしっかり抱きしめる）

何ということをして！

デジレー：

（彼女の声は、か細くなっていき、子供のようにかん高くなる）

でも、私には子供がいるんです！ 自分でそう思っているだけでしょうか？

裁判長：

（彼女を安心させるつもりで）

お前には子供が一人いる！

デジレー：

晩、あの子の体を洗ってやる時、あなたが付いていなければなりません！ バルバラは年をとっていますし、もう目が見えないのです！ 私も、もう目が見えません！ まだ若いのに！ 人が死ぬときは、こうなるのでしょうか？

裁判長：

（うめき声をあげる）

死にはしない！

デジレー：

目の前に雪がちらついています！ 私は、やっと分かりました！ 神がこの世に男と女を造りたもうたことを・・・何かおっしゃいましたか、お父様？

裁判長：

子供だ、子供がいるんだぞ！

デジレー：

（言葉尻をとらえて、安心し切ったような口調で）

そうだわ！ 親と子供はそれでも生き残るのね！

（裁判長が自分をベッドに寝かそうとしているのに気づいて、彼の腕にしっかりしがみ付く。子供が泣くような調子で）

しっかりつかまえていて下さいね！ 私を離さないで下さ

い！

（裁判長は彼女をしっかり抱き締めてやる。彼女は気を静める。自分の言葉を確認するように、弱々しくうなずきながら）

まだ生きることが出来たら・・・でも、もうだめ・・・

（深く息をつく。裁判長の首に巻き付いていた彼女の腕が解け、落ちかかる。裁判長は彼女をベッドに寝かせる。宿屋の主人の父がひざまずく。彼のランタンが床に落ちて、音をたてる。裁判長は、驚いて立ち上がり、小声で祈る老人を見つめる。はじめて彼は、娘が死んだことを理解する。彼は娘の上に身をかがめる。それから、大きな悲鳴をあげると、うめきながら、遺体の上に身を投げ出す）

シャロレ：

（前方に身を屈めて、聞き耳を立てている。それから、体を起こし、少し身震いして、探るように辺りを見回す。小声で、不安げに）

誰も俺の方を見ない！

（宿屋の主人の父親が、彼の言葉に打たれたように、彼の方を向く）

親父さん、あんただけか？

（救いを求めるように）

ロモント！

（ロモントは、ゆっくり彼のかたわらに歩み寄り。彼は、首をうなだれている）

どうして首をうなだれているんだ？

（ロモントは、仰ぎ見る）

君は泣いているのか？

（大声で）

あの女が死んだから、この芝居は終わりだとでも言うのか？ 俺はどうなるんだ？ 誰も俺のことは考えてくれないのか？

（自嘲するように）

俺が彼女を死に追いやった！ 俺が彼女を「追いやった」！ いや、「追いやった」のは、俺なのだろうか？

（頭を横に振りながら）

俺じゃない！

（真剣に、力強く）

「あれ」が俺たちを追いやったんだ、俺たちを！ 追いやったのは、俺でも、あんたでもない。「あれ」なんだ！

（一気に、テーブルの方に歩み寄り、軍刀を帯び、コートを肩にかける）

ロモント：（驚いて）

今から、どこに行くつもりなんだ？

シャロレ：

死にはしないよ、ロモント！ 昼間は、彼女のことを考えたくなくなるほど、雨や嵐、太陽が、俺の額をひどく濡らし、叩き、焦がすようなところ、夜は、鉛のように思い眠りが、俺の疲れ切った体にのしかかり、未生の夢が俺の息を詰まらせてくれるところに、職を見つけに行くんだ！

(考え込んで、ひとりごとを言う)

長い冬の夜、野営の焚火を囲んで、口軽に、恥知らずにも俺は、博打打ちや売春婦たちに、ここで起こったことを、不幸が俺たちを見舞ったいきさつを話して聞かせるだろう。でも、どうしたそうだったのか・・・

(深く息をついて)

それを誰が俺に話してくれるんだろう？

(ゆっくり、デジレーの遺体の方に歩み寄る。裁判長は身を起こす)

裁判長：

(彼女を彼から守ろうとするかのような身振りをして)  
娘に近づくな！

シャロレ：

(立ち止まる。声を震わせて)  
私は彼女を愛していました！

裁判長：

愛していただと！ それじゃ、どうしてこんなことになったんだ？

シャロレ：

(うめき声をあげて)

私は何もしていません！ あれが私にたいしてなされたのです・・・

(気を落ち着け、肩をすくめて)

いや、そうじゃない！ あれが起きたのです！  
(歩き出す。彼の脚は、床に落ちた裁判長のマントにふれる)

この華やかなマントを拾い上げて、それで彼女を覆って下さい！ 遺体を包む布になるのが、このマントの宿命だったのです！

(彼は立ち止まって、振り返り、遺体の方を見る。小声で)  
お前は、あそこに死んで横たわっているのに、誰も俺をお前のところに行かせてはくれない・・・

(両腕を唇に押し当てる)

こうやって、俺はお前に口付けがしたい。俺はお前を愛していたんだ！ そのことは、お前にも分かっていた。俺が悩んでいたことも！

裁判長：

(大声をあげて)

君が悩んでいたって？ 馬鹿なことを！  
(すすり泣きながら、遺体の上に身を投げる)

シャロレ：

お互いの苦しみの優先権を争うなんて無意味です！ 二人の大人の大人が！ 彼女を識っていたものは、別れを告げればよいのです！

(テーブルから帽子を取って、出口に向かう。宿屋の主人のそばに立ち止まって、小声で)

あんたは神を賛美し、神があんたから声を奪ったというわけなのか？

(裁判長を指し示して)

あの人も神を賛美した！ ただ、神は、あの人には、うめくだけの声を残したのだ！

(ひとりごとのように)

祈りであれ、罵りであれ、神に向かって多くを語りすぎると、彼はそれを快く思わないようだ。むしろ、神は憎しみを抱く。彼に余りにも期待をかけると、神は、自分が誘惑されたと感じるのだ！

(彼は、子供が寝ている部屋のドアのところにたどり着く。ドアを開いて、頭をドアの枠にもたせかけ、月明かりの部屋の中を覗き込む。彼は、うなだれてすすり泣く。それから、無理に平静さを装った声で)

もう一つお願いがある！ 中で子供が眠っているんだ！ あの子が目を覚ましたら、母親と、おそらくは父親を呼ぶだろう。彼女も俺も、二人とも、もうその声を聞くことはない。ドアを開けたままにしておくから、声が聞こえるように、あの子のそばにいてやってくれ！

(先に進む。ロモントが、行く手を遮る)

ロモント：

俺は？

シャロレ：

(両腕を彼の肩の上に置いて、彼を見つめ、小声で)

ロモント！

(間を置いて、手短かに)

もうしばらく、見張っていてくれ！

(ドアのそばに立つ。大きくはないが、はっきりした、穏やかな声で)

親父さんは、先に行って、玄関を開けてきてくれ！ 爺さんは、廊下を照らしてくれ！ それから灯火を消したら、それで、この芝居は終わりにする！

(宿屋の主人が先に立って行く。彼の後から、静かな足取り

で、右手に灯火を高く掲げた彼の父親が続く。最後に、彼らの後から、シャロレが歩いて行く)

## 幕

底本として、

Beer-Hofmann, Richard: Gesammelte Werke. Hrsg. von Otto Kallir. Frankfurt am Main (Fischer) 1963. を使用した。

## 解 説

一九〇四年十二月にベルリンにおいてマックス・ラインハルトの演出で初演された戯曲『シャロレ伯爵』は、リヒャルト・ベア=ホフマンのもっとも成功した作品のひとつであるといえる。この作品で、彼は、一九〇五年、ゲールハルト・ハウプトマンとともに国民シラー賞を受賞している。検閲の問題でオーストリアでの上演はかなり遅れ、一九二二年十月にブルク劇場で「遅ればせの初演」がなされた。これをみたローベルト・ムージルは、この作品の「年々深まる魅力の秘密」を「古い筋書きの新しい衣装を身につける素朴な喜び」, 「深遠さ、素朴さへの傾斜」に認めている<sup>1)</sup>。

舞台は、数百年前のブルゴーニュの首都。休戦の功労者であるシャロレ老将軍は、講和条約の締結直後、誤解から敵の兵士に射殺された。戦時中、自軍を飢えから守るために彼は大きな借財を背負っていた。債権者たちは法律を盾に彼の遺体を差し押さえる。

第一幕。息子のシャロレ伯爵は、友人のロモントとともに、待合としても利用されているある粗末な宿屋で、債権者たちが起こした訴訟の開始を待っている。

第二幕は、裁判長ロシュフォーの屋敷の客間。おりしも、彼の娘デジレーの十八歳の誕生祝いが開かれている。六十歳でもうけたこの娘を、彼は盲愛しており、将来の婿を選ぶとき自分の選択にしたがってくれるよう彼女をさとす。

第三幕は法廷の場で、シャロレは、父の遺体と交換に自分を拘禁するよう主張する。シャロレのなかに娘の理想の夫を見出した裁判長は、自分が借財を肩代わりすることにしてシャロレに彼女を妻として迎えてくれるよう頼む。

第四幕は、またしても裁判長の屋敷の客間だが、三年が経過している。家長シャロレは新宮殿の造営の件で真冬の夜遅く家を空け、デジレーがあとに残される。ロシュフォーの甥、フィリップは、その機会を利用して、自分が以前から愛していた彼女をかどわかし、あの待合に連れ込む。

第五幕。吹雪のために引き返してきたシャロレは、フィリップたちが待合にはいるのを目撃したロモントの注進で、

彼らを取り押さえる。フィリップを絞殺した彼は、裁判長を呼ぶ。ロシュフォーは、シャロレの執拗な要求に屈して判決を下し、彼女が死に値することを認める。デジレーは短刀で自殺せざるをえない。その後ようやく、彼は激しい狂気から目覚める。「この芝居は終わりだ!」という彼の言葉とともに、舞台は暗転し、登場人物たちは、静かな足取りで舞台を後にする。

この戯曲の筋は不意に急転する。それは、運命そのものが「登場人物とはまったく無関係に」「ドラマの主導者」となっているからだ<sup>2)</sup>。確かに、盲目的な運命は、この戯曲の本来の主人公であるといえよう。これにたいして、登場人物たちは、運命の無力なあやつり人形と化している。絶望的な状況が思いがけなく打開される最初の三幕は、幸運をもたらす運命のポジティブな作用を、逆に、幸福な状況からはじまって破局に終わる最後の二幕は、そのネガティブな作用を例示しているといえる。突然、恣意的に変化する運命に、登場人物たちはひたすら身をゆだねる。

小説『ゲオルクの死』(一九〇〇年)の主人公パウルは生を恐れており、その不明確さと御しがたさゆえに生から距離を保とうと努めていた。ベア=ホフマンは、この戯曲でそうした生の御しがたさがまねく破局を具体化してみせたといえよう。第一幕の幕切れで「僕の進む道に疑いを抱かせてくれるな、僕からこの確実な歩みを奪わないでくれ」と叫んだシャロレは、最後には、人生に確実な歩みなどというものは存在しないことを悟らざるをえない。

運命の神秘的で予測不可能な作用というモチーフが、この戯曲に統一を与えている。シャロレは、第三幕の結末で、父の遺体を債務者の拘置所から引き取ることに成功するのみならず、裁判長の美しい貞淑な娘と結婚し、夢だにできなかった幸福な生活を送る見込みを手に入れるが、最後の二幕で、彼と彼の愛する妻を破滅に追いやるのも、同じく予測不可能な運命なのだ。

運命のモチーフによってもたらされた統一は、戯曲の構造によりさらに強化される。この戯曲は、同一の場所ではじまり、終わっている。つまり、宿屋が第一幕の舞台であり、第二幕から第四幕にかけて、場面は、裁判長の屋敷、法廷、また裁判長の屋敷と移行し、第五幕でふたたび宿屋に戻るのである。

第三幕の結末で、シャロレは、自分の運命の信じがたい好転にとまどい、呆然とする。

第四幕の誘惑の場面のと、デジレーの不貞が次第にあきらかになってきたときの彼の反応も同一である。

唯一の相違は、最初の「夢」が幸福な夢であるのにたいして、二度目の「夢」が悪夢であるという点である。この相違が、運命の不可解で予知不可能な性格を強調している

ように思われる。

また、筋の節目には、それぞれ偶然生じた出来事が配されている。そして、筋が喚起する作品の構成原理としての偶然は、登場人物の罪にたいする責任を免除することになる。作者が「筋の展開を無視して彼らの潔白を示そうと試みる」<sup>3)</sup>につれて、彼らの潔白の印象はますます強められる。

このような、いわば「悲劇的な潔白」については、作者自身がフォルトリーデとの対話のなかで言及している<sup>4)</sup>。さらに、一九一九年五月七日付けのホフマンスタールあての手紙では、この「悲劇的な潔白」の意味が次のように説明されている。

「この作品で私が問題にしたかったのは、どんなに純粋な、めぐまれた、敬虔な人間にも、いつかはきざすかも知れない、あの恐ろしいものなのです。そのとき、彼は獣以下に落ちぶれ、人を単に殺すのではなく、残酷に殺戮するのです。こうした恐ろしいものから完全に守られている人はいません」<sup>5)</sup>。

「恐ろしいもの」は、いつでも人の心に急に萌すので、各人にその責任を問うことはできないわけだ。

この戯曲では、運命と偶然の連関、登場人物の運命を展開させる決定が偶然によって規定されるというパラドックスが、彼らの性格や社会的な地位、「人間相互のアクチュアリティ」<sup>6)</sup>とは無関係に、舞台の上でさまざまな形をとって生じている。それは、作者がこの作品に「哀悼劇」(Trauerspiel)という名称を冠していることと深く関連しているように思われる。

確かに、上述の偶然と運命の関連付けにはバロックの哀悼劇とのある種の類縁性が認められる。世紀転換期のウィーンでは、この伝統的な戯曲の様式のリバイバルが世人の耳目をひいていた<sup>7)</sup>。ホフマンスタールも、一九〇四年に、五幕の哀悼劇『救われたヴェネチア』を完成させている<sup>8)</sup>。

ヴァルター・ベンヤミンは、哀悼劇と悲劇を歴史的に峻別しているが、彼によれば、この戯曲には、バロックの哀悼劇の「変種」である「運命劇」の概念が適用できるように思われる<sup>9)</sup>。

「運命の主体は誰であるか規定しがたい」。それゆえ、哀悼劇には主役がなく、あるのは状況だけだ。[・・・] 運命劇では、人間の本性が盲目的な情熱のうちに、事物の本性が盲目的な偶然のうちに、共通の運命の法則のもとで語りかける。」<sup>10)</sup>

自らの行為の正当さに固執するものは、結局、正当と不当の相違が破棄される激情のなかに退歩することになる。

『ゲオルクの死』では、個人の運命を超越する領域、神の「正義」の権威が声高に主張されていたが、この戯曲ではそれが決定的な変化をとげている。自らの運命に受動的に身をゆだねる登場人物たちには、神を正当化することができないのである。

神にたいする無限の信頼にもとづく信仰は独善的な自慰と化しやすい。「恐ろしいもの」にたいしてわが身を守ることだけにこだわるものは、かえってそれに身をゆだねることになる。敬虔であるだけでは、それに打ち勝つことはできない。むしろ、絶対的な掟のもとでわが身の安全を意識しながら、受動的に自らの運命に屈服することで、彼らは不正を働いているともいえる。

マルティン・ブーバーが強調しているように、死はベア＝ホフマンの作品における基本モチーフである<sup>11)</sup>。『シャロレ伯爵』では、シャロレとフィリップが、死をめぐる想念を正反対の仕方でも展開し、それぞれ、死の脅威にたいする別様の回答を見出している。母なしで成長したシャロレは、すではやくから孤独感にさいなまれ、父も失った今、絶望的な虚無感に身をゆだねている。父が彼に、死の無常の力を常々語り聞かせてくれていただけに、この虚無感は、若いシャロレにはなおのこと威嚇的に作用する。

デジレーをめぐるシャロレの恋敵、フィリップも、生を死の相の下でみる。

彼は、単なる享楽主義者ではない。生を追求することで、彼は、死の裏をかくか、すくなくとも死と最終的に帳尻を合わせようと試みている。生は「激しく求めること」ではじめて具体化されると信じている彼にとって、デジレーを誘惑することは、彼自身の官能の欲求の帰結であるというよりは、むしろ、死にたいする彼のいわば力ずくの回答なのである。

また、この戯曲の冒頭と結末では、際立った対照をなす二つの死が呈示されている。

シャロレの父は冒頭部ですでに死んでいるが、観客は、彼の死の詳細を、ロモントと宿屋の親父の会話を通して知ることになる。この將軍の高貴で英雄的な死とは対照的に、デジレーの死は、すくなくともみかけは恥辱に満ちた不名誉な死である。この二つの死は、予測不可能な運命の気まぐれを例証している。運命の最後の気まぐれが死であって、これにたいして人間は無力であるようにみえる。

だが、ベア＝ホフマンは、この戯曲のいくつかの個所で、死に応酬するかすかな可能性を暗示している。たとえば、シャロレは、自分の息子について、「彼の代理人、私はそう自認している」と述べ、自分自身と妻にかんして、「われわれ二人が重要だったのは、この子が生まれる前だけだ。



彼がここにいる以上、造化はもはやわれわれを必要としない！」と語っているし、死に瀕したデジレーは、父に向かって、「そうだわ、父と子はそれでも生き残るのね」と「深く満足した口調で」語る。これらの科白は、観客の注意を、これまでは何ら重要な役割を演じてこなかった子供に集中させることになる。『ミルヤムのための子守歌』（一八九七年）や『ゲオルクの死』のなかではほのめかされていた、子供のなかで死が克服されるという考えが、ここで再び示されているわけだ<sup>12)</sup>。

さらに、家族のきずな、とりわけ世代間のきずながこの戯曲では強調されている。このことは、シャロレの父にたいする愛と誠実、デジレーや義父である裁判長との関係ばかりでなく、戯曲の脇人物たちの家族関係においてもあきらかである。

こうした死にたいする回答は、他のモチーフに覆い隠され、ごくかすかな希望としてしかあらわれていない。この戯曲の基調をなしているのは苦いベシミズムであるが、このような希望がほのみえることは、死にたいする回答を模索するベア＝ホフマンが、子孫や家系の継続をひとつの可能性とみなしていたことを証明している。さらに、この希望が最後には一種の確信にまで強められることを、後年の聖書劇が示している。作家はそこで子孫のテーマをさらにはばひろく取り扱い、それをひとつの家をこえて一民族にまで拡張することになる。

ユダヤ人イーツイヒは、債権者のひとりで能弁ゆえにシャロレとの審理に立ち会う義務を負わされている。確かに、彼の生も、運命と恣意的な偶然の手にゆだねられている。だが、彼の置かれた立場は特殊である。他の人物たちがともかくも幸福だった過去を思い出すことができるのに、ユダヤ人である彼は、最初から希望のないアウトサイダーの地位に留め置かれているのである。

ベア＝ホフマン自身、同化やシオニズムのはざままでユダヤ人のアイデンティティーを主張することの困難さをはっきり意識していたようだ。彼は、一九一三年四月三日付けのマルティン・ブーパーあての手紙のなかで、次のように述べている。

「われわれは、他の民族とは異なる価値判断の原則にしたがっています。望むが望まいが、われわれユダヤ人の行動は、われわれの運命が作りあげた舞台のうえでなされるのです。全世界が、横着にも観客席について、ユダヤ人を見つめています。われわれの目つき、声、態度、髪の色、体つき、すべてが、陰険な裁き手の話題になります。われわれが半神半人として舞台のうえを闊歩できないのはつらいことです。」<sup>13)</sup>

また、イーツイヒは、ユダヤ人であるという理由だけで、その経済力に起因する非人間性を非難される。自分を拒絶する人間性の領域に足を踏み入れることができない彼は、反ユダヤ主義成立の要因である社会的困窮にたいする贖罪の山羊の役割を押しつけられているともいえよう。

イーツイヒの言葉からは、ユダヤ人主導の貨幣経済を背景にキリスト教徒とユダヤ人のあいだの極端な反目を生み出した憎悪と依存の関係が読みとれる。

「どうしてお前は自分の憎しみをすべて、今この僕に向けるんだ？ 僕に一体何ができるといふんだ？ 僕が一体お前に何をしたいというんだ？」というシャロレの問いにたいして、イーツイヒは、「まだ何もなさってません！ 今までその機会がなかっただけです」と答える。

ユダヤ人の歴史は迫害の歴史であり、そのことが彼らが人間らしくふるまうことを困難にしているのである。社会への融合を拒絶された彼らは、また、自分たちを排斥する社会組織の虚偽を、身をもって経験することになる。イーツイヒが登場するのはほんの一瞬だが、その瞬間、彼の運命、ひいては、自己のアイデンティティーを放棄して同化することを余儀なくされたユダヤ人全体の運命が、観客の目の前に呈示されるのだ。

だが、イーツイヒの登場で、運命と偶然の弁証法というこの戯曲の基本論理が破綻をきたしていることもまた確かだ。「冒とくされたユダヤ民族の問題を、模範的に、ポレミカルに代表する「赤毛のイーツイヒ」の形姿は、告白の効果の背後で空回りしている。」<sup>14)</sup>

ユダヤ人である彼は、偶然がもたらす恵まれた運命とは無縁の存在なので、彼の生は、他の登場人物たちの生とは根本的に異なる条件のもとで展開されざるをえないのである。「人生は夢」というバロック哀悼劇の中心的なモチーフは、周知のごとく、世紀転換期のウィーンの作家たちにとりわけ愛好されていた。ベア＝ホフマンもまたその例外ではない。

自分の運命が激変するとき、たとえば、第三幕の結末で自分の窮状が思いもかけず解消されたとき、シャロレには、現実が夢に変容する。また、第五幕でデジレーの不貞があかるみに出た瞬間、今までの幸福な家族図が彼には夢のように思われるのである。

夢と現実がたがいに他に転化しうることを知っているからこそ、シャロレは、妻の不貞が悪夢にすぎず、自分がそこから目覚められるように祈る。そして、覚醒がまったく不可能であることを彼が悟るとき、破局が訪れるのである。今まで夢の形象の流れにひたすら身をゆだねていた彼が、その夢の確固たる必然性に気づくとき、破局が起こるといってもよい。

「人生は夢」という伝統的なモチーフを受容することで、

はじめて、ベア=ホフマンは、彼の初期作品全体を貫通するテーマを構築することができたのである。

死と無常、孤独、運命と偶然の緊張のなかで、生の夢幻性が問題にされている。しかもそこには、神の正義やユダヤ的な世界観が深く浸透している。

『シャロレ伯爵』以後、作家は、『ゲオルクの死』執筆の最終段階ですでに着手していた聖書劇の連作に専念する。それゆえ、神の正義にたいする試練をあらわすこの戯曲は聖書劇への一種の過渡的作品とみなされよう。

聖書劇では、聖書の世界が劇という形で具象化され、作家のユダヤの伝統への回帰が神の正義と個人の自責の弁証法として描き出されることになるのである。

ベア=ホフマンの全創作というコンテクストのなかで『シャロレ伯爵』を考察してみると、この作品が、神と世界の秩序の概念を現世の苦しみ、醜悪さ、不正と調和させようとする、作家の悲痛な努力の芸術的な表現であることがわかる。『ゲオルクの死』から『シャロレ伯爵』をへて聖書劇にいたる彼の歩みは、彼が生涯こうした努力を断念しなかったことを証明している。

#### 注

- 1) Musil, Robert: Wiener Theater [19.Oktober 1922]. Eine verspätete Erstaufführung. In: Gesammelte Werke in neun Bänden, Bd. II. Hrsg. v. Adolf Frisé. Reinbek (Rowohlt) 1978, S.1605.
- 2) Nickisch, Martin: Richard Beer-Hofmann un Hugo von Hofmannsthal. Zu Beer-Hofmanns Sonderstellung im "Wiener Kreis", Diss. München 1980, S.148.
- 3) Nickisch, Martin: a. a. O. S.147.
- 4) Vgl. Vordtriede, Werner: Gespräche mit Beer-Hofmann. In: Das verlassene Haus. Tagebuch aus dem amerikanischen Exil 1938-1947, München (Hanser) 1975, S.294.
- 5) Hugo von Hofmannsthal – Richard Beer-Hofmann: Briefwechsel. Hrsg. v. Eugene Weber, Frankfurt am Main (Fischer) 1972, S.150.
- 6) Szondi, Peter: Theorie des modernen Dramas 1880-1950, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1985, S.75.
- 7) Vgl. Bauer, Roger: Die Wiederkunft des Barock und das Ende des Ästhetizismus. In: Fin de siècle. Zur Literatur und Kunst der Jahrhundertwende. Frankfurt am Main (Klostermann) 1977, S.206-222.
- 8) ホフマンスタールの場合、戯曲の筋は強者ピエールと弱者ジャフィエのあいだの心理学的に動機づけられた葛藤から導き出されている。この強者と弱者の対比という構図には、『イエーダーマン』（一九一一年）や『ザルツブルク大世界劇場』（一九二二年）のような寓意劇への志向がすでにはっきり認められる。バロックの世界劇場の表現形式を利用しながら、ホフマンスタールは、文化の現状を批判することになる。
- 9) Vgl. Benjamin, Walter: Ursprung des deutschen Trauerspiels. Hrsg. v. Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1982, S.109.
- 10) Benjamin, Walter: a. a. O. S.112f.
- 11) Vgl. Buber, Martin: Geleitwort [zu den Gesammel-ten Werken], Frankfurt am Main (Fischer) 1963, S.5.
- 12) この考えについては、拙論「リヒャルト・ベア=ホフマンの『ゲオルクの死』について」[オーストリア文学, 第2号, 一九八六年]の十七頁を参照。
- 13) Buber, Martin: Briefwechsel aus sieben Jahr-zehnten. Bd.1: 1897-1918. Heidelberg (Lambert Schneider) 1972, S.327f.
- 14) Kraft, Werner: Richard Beer-Hofmann. In: Wort und Gedanke. Kritische Betrachtungen zur Poesie. Bern/München (Francke) 1959.